

持続可能な社会基盤

パネルディスカッション

なるか地方再生 地域ブランドの創出



パネルディスカッションの様子



コーディネーターを務める米田氏



パネラーとして参加した上西氏、清水氏、菅野氏、橋岡市長(左から)

メイン企画のパネルディスカッションでは、基調講演した上西氏が郷里である奈良県吉野の桜を引継ぎに出し、黙っていても全国からお客さまが来てくれる状況に感謝しながらも、有名な桜ばかりに頼ってしまう危険性を指摘。地元住民が自覚し、連携して地域活性化に取り組んでいく大切さを強調した。

特別講演した清水氏は、高岡のタクシー運転手に「高岡は2泊しないと良さがわからない」と言われたことに言及。見どころが多い街であることを評価した上で、近年の観光客の傾向を、「滞在型で、しかも民泊を好む」と説明した。修学旅行期間中、民泊を1日組み入れる学校が7割に達する現状は、子ども達に歩かせたい、風を感じさせたい、地元の人との触れ合いを体験させたいという意図からという。

また、別段、有名な観光資源のないところでも十分に観光地として再生できるという見通しを示した。まちの中をただぶらぶら歩ける仕掛けを工夫するだけではない。今ある資源を生かし切ることでという。

さらに、新幹線や高速道路は必要ではあっても十分条件ではないとも付け加えた。開通した後に空洞化が進行してしまっただ事例は全国にいっぱいあり両刃の剣。大都市圏に賑わいが吸い取られるストローク現象の犠牲者にならないようにも忠告した。子育てのように、小さく生んで大きく育てる発想が重要であり、地域再生もまったく同じだと話した。

フォーラム開催地の橋岡市長は、かつて九州地方に出掛けた折、

当市を富岡市や高山市と間違えて紹介された苦い経験を披露。単なるお喋りとした不注意ではあっても、実はその間違いの持つ意味合いは大きく、全国的な知名度が依然として低いという現実を象徴したエピソードだと受け止め、市長は「だからこそ瑞龍寺や勝興寺、山町筋の歴史的な景観など、今ある様々な観光資源をよりシャープに全国に発信していきたい(キャッチコピーを分かり易さ重視で、ただ一つに絞り込むことは至難の業)。

橋岡市長は、「はからずも世界遺産を目指す取り組みは、それらを束ねてアピールし、高岡らしさを創出するいい契機になった。ぜひとも市民の願いを実現させたい」と力説した。

北海道オホーツク21世紀を考える会の菅野伸一会長は、開町400年を迎える高岡市の歴史の重みに感嘆した後、自社が参加した建設入札で、総合評価方式により14社中12番札だったが、価格以外の社会的な貢献度が加

点され落札できたと紹介。建設業の生き残る道は、地域とともに歩むことで見い出せると強調した。司会を務めた慶應義塾大学理工学部教授の米田雅子氏は従来の発想を一大転換し、縦型から横型へ。つまり地元住民をすべて横のつながりでまとめていくことが大切で、その地道な作業のなかで活性化が生まれる。建設業もその仲間の一員として大いに活躍していけば、自ずと道は拓かれるのは、などと討論を締めくくった。